

子  
子

女  
宗

異  
素  
帖

六

五  
丑  
寅  
卯  
辰  
巳  
午  
未  
申  
酉  
戌  
亥

六帖五十五段通計

- 一 初三全盛の威をとりよより以下乃
- 廿二段女郎れう(をりよ
- 廿三より十二段客の事とりよ
- 廿五より十一段雜事とりよ
- 四十六より五段又女郎をりよて秘

下

とあり次

- 一 五十一五十二又客の談笑とりよ
- 一 五十三より五十五まで総論

太夫の揚屋入

紫陌紅塵

拂面来

無人不道

看花回

て女のことく

てん



紫陌紅塵 九ノ唐の太夫此名あり  
志げくはむまのちとよむ 我朝よ花紫  
小むまきとりておま乃通り名とすれ  
るすめり 紅塵とはおまれちりし  
きりうきもしおまの名とれ我朝よま  
お紫のまんまてき庵と名附貴ぬこの  
いよ素足の人ハ志とんてりる  
地せりとし

女席の被の内

冷艶レイエン全欺雪ゼンキセツ  
餘香ヨウカウ衣イ入イ衣イ

けふ九きり小ほひめり那

冷艶レイエンとハけめくやきくといまま

あふさむなごころ云々く春まきま

肌ハダの香カウれ知チ乃ノかほりカホリ花ハナさく

いふ一まきく南

下三

三月花中の町

名花メイカ傾國ケイコク兩相歡リウサウカン

か心乃かすきき次もあらん

名花メイカ傾國ケイコク或説アルセツいそくとあふかつく

黄令ワウレイ鼻紙ビシのまきとらふ又傾ケイ傾ケイ傾ケイ

の傾ケイあふ寸と今日ケイ白ハクいつめあ

女席メダと橋ハシとたまたのむとま

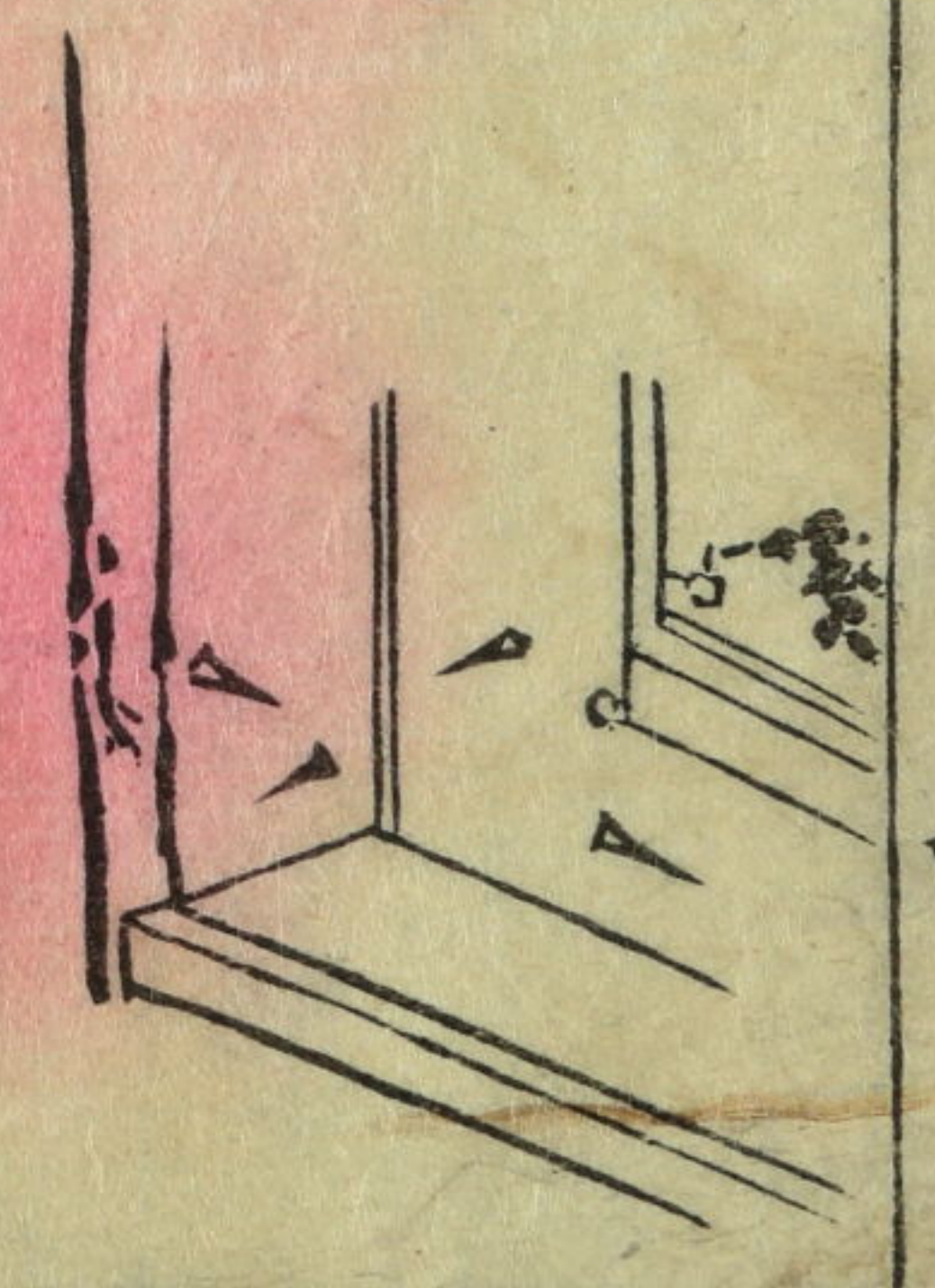
むんきう女郎

年光チニ多イタトコ到處

皆堪賞三ナタタリニヤウカ

永身世ふら

はらうめせー海り



下

年光はさくさくけー女帝れもさう口乃  
薄くもげてひろる男子あれをわすはの光る  
ころくさくさくさくさくさくさくさくさく  
あるをりよかやう平さくさくさくさく  
女帝乃格別クハツなり誠

みふ人感ぢ

とな案

年あきのちう近い女帝

紅こ粉こ樓ろう中ちゆう

應オサニ計カク日ヒ

おとくハ

い  
之ーき

一

おお数か楼ろう多た女帝にうていのの化け粧じゆうすするるここううららここ  
ののああきき日ひととああいいああううううそそととししよよしし  
はは事じなり

下

けけんんふふめめるる女帝

白ハク眼ガン看カン

あり

なり  
多

他タ世ノ上セ六ヒツ

あり  
我

白ハク眼ガンハハ少すくくむむ之之又又紅こう目め之之床こ板ばん平へい  
ありありかかアアささららあありりききはは目め前ぜんののやや  
なりなり此この詩しをを多た情じやうあり

欠落し〜ら女帝

返照ヘニセウ入閻イリヨ巷カウニ

憂来誰ラレヒキタツテタレト

共語トセニカクラン

あたるて

け世紙

す〜てよ

とわ

返照ヘニセウハ生イキ一ヒト生ナリと過ス去ク一ヒト〜と

別ワ世界セカイの住ナマ居カひを女メ習ナ代シ巻マキの意イ味ミ

丸閻マ巷カウハ町チヨウ乃裏ノウ屋ヤ〜

ありてけ世セ勤チンと止トて客キヤクよあもて世セと流ル〜

下あ

いびと切〜女帝

憑ヨリテ漆シ兩リウ行カウ淚ノナミダ

寄ヨリテ向カウテ故コ園エン流ル

たうれとあ〜ぬのみちのりあ

憑ヨリテハいびとをま〜り〜心ココロ〜ら〜女メ眼メ〜

涙ナミダとあ〜ら〜故コ園エンハ小コ撮サツとほ〜と血チを

小コ人ニ〜カ〜出デ〜流ル〜と〜

六中



時花女帝

春潮

夜々

深

人こそちるね

かまくま

か

春潮はうーはし夕時乃ますといとく  
盃とますと三結とむくとと夕のさ  
いくとがささへくいるなり

るやうぬ女帝

客舎平居

絶送迎

つう身むとめ乃秋よはつるね

客舎ハ女帝居たり平居ハ足世

けうりあそき乃をうらむくも

さらをりよ

心中と一ノ女帝

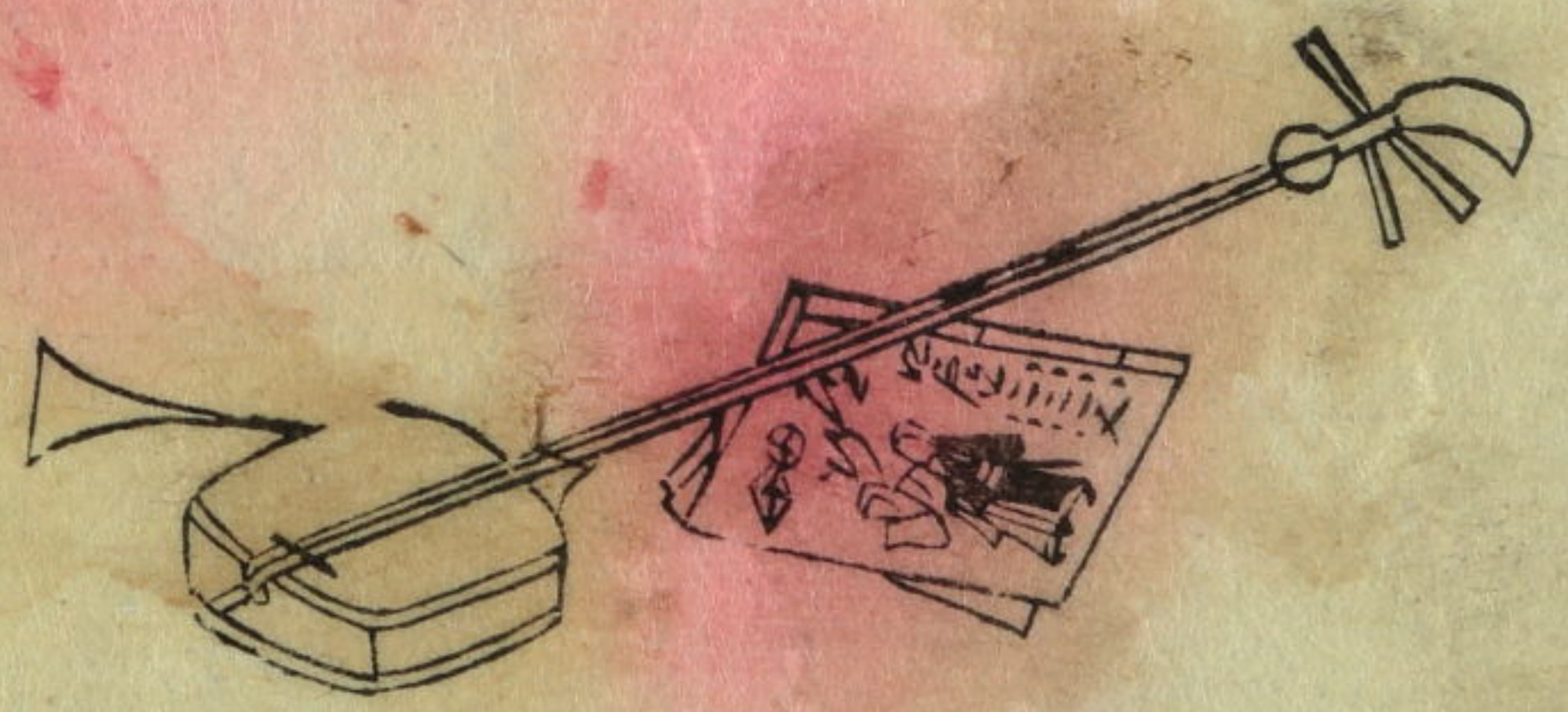
縦死クハヒシス

猶聞ナラナク

俠骨ウラハ

香カニ

名こそなるわくかこころにこそ



俠骨とけ世の聲澄らしてたふハ  
又それ声こそユハ スキンセンニヨ ながと  
きやこころよりよき事と  
うらまの昔かきこころのこころとよ事  
名こそは明かして うれかひのこころ  
たふれ乃力こそく又よき事とよ事  
とよ事とよ事

口中とハヤク女席

我心渺無際

河上空徘徊

人のい乃ちれわくくもそくれ

渺としてハ屏風のぬちよある鏡のそく

くよあまをちあまのそくよあめけてそく一き

あめとりよ河上ハ川岸と通とかくのそく

はるめさ女席ハ川岸へあてそくそくそく

下九

俄に客のつらと女席

空山不見人

但聞人語響

あがりてたのう人乃こひりさ

空山ハ客跡くにてそくよはやうさんて

ふ系々よめと女席ハたあくの人の

あまのそくそくそくそく

あまうそくそく揚々中一獨店よあまう

素性のよめ女帝

美人天上落

あまのくちなし

なまのしほり

て上より降るといふ人のともりて  
さざらよまき人乃のやーさつあするやんさる  
とり成説して上より降るといふ行き女は  
腰のわねいといと繋するこころごとく

性ありて女帝

澗水東流復向西

身乃くはく母

系里想つる

澗ハ間へ引去るのりく水ハ粹く引去るす  
乃乃登るがハるぬやん凡て是を同粹  
とよ東流ハ流れの身のひりて人とも  
あやなり西の人ともるめるとり

横よある女帝

相見兩不厭

あまのこころは

今か過り去る

あたらしくいそぎ  
あふ不厭と、あふさるをにうさめたえんれ  
けうとく武説あつちかよ云不厭いとハミを助のふ  
けうとく子このちかけ説このちかまうこのちかずはくもえ  
たれえく

いやなまようけけけ 女帝

只有此山中  
雲深不知處

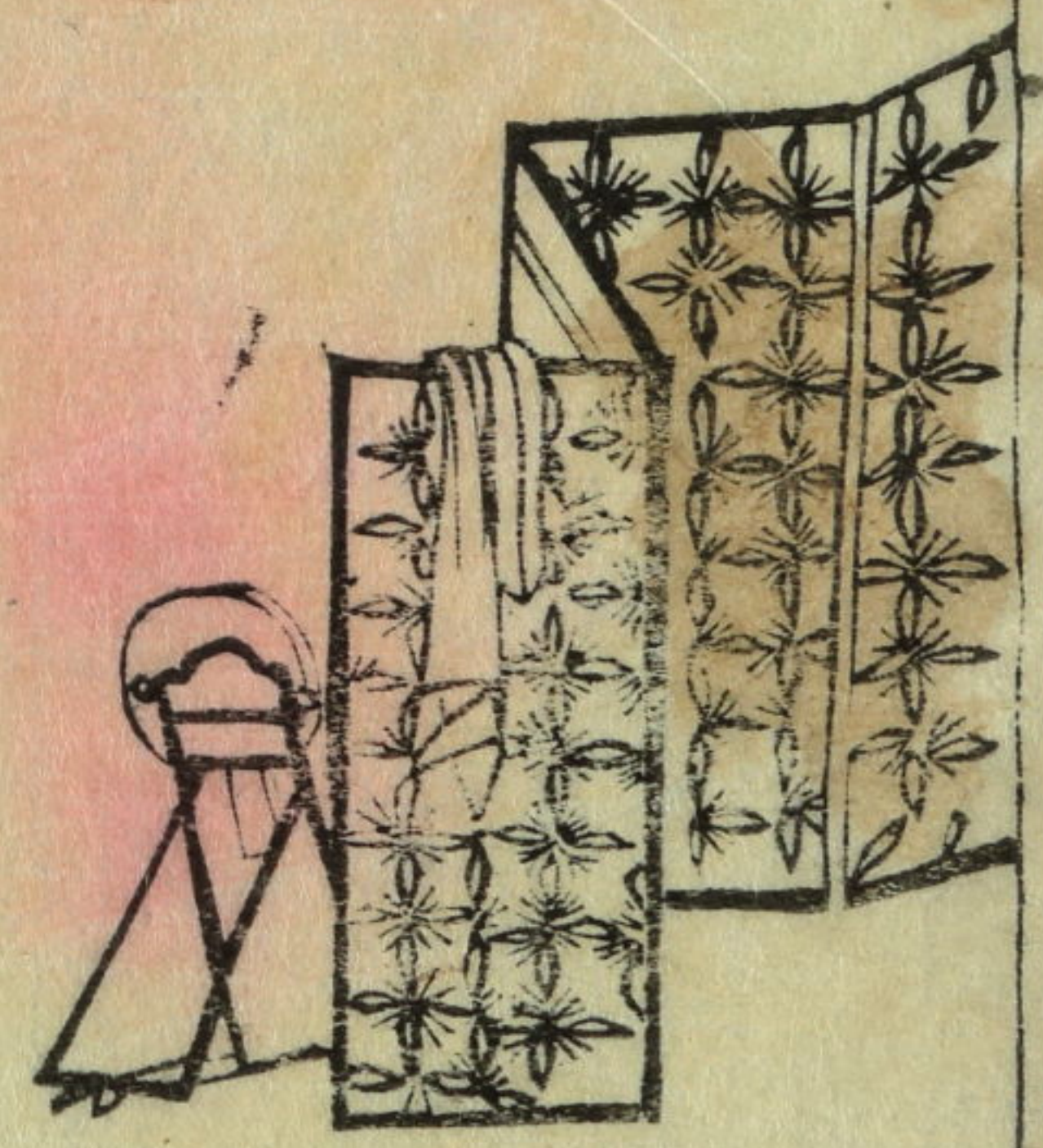
まうしゆれとちめらまうるの

雪深ゆきふかてとハいをもおる頂天たか之  
下晴しよやみ雲覆くもといゆことく

くめんの

おまめ

女席



妻心正断絶

君懐那得知

ものやにゆくと人乃とよま

勢とハ女の自稱れ調くろの初と考工  
 玄宗皇帝色とあゆんど懸と考と  
 一より女とくを酒とあより或を  
 踊よ志より舞くとのあゆより定め自  
 分のさうとかゆひこつとも舞とひより  
 女乃通称とあり君と懐とハ考と考と  
 一よその方れくめんあしくろ一む  
 とやの乃一しめとくもさるく

くめんのあは女帝

但見タミル涙痕ルイ湿コンノウレホコ

不知スレチラ心恨ココロウラム誰メシラカ

人とも身ともさうらみあはる

涙痕はうらみのたうら目とらるは  
とよあはびやめいぞんそなくとひ

賣ウれ

ある女帝

故郷コキョウ今夜コノヤ

思オモフ千里センリ

字ジとら

せめ

今もこころ



親のよめよりある女席

獨在異郷為異客  
每逢佳節倍思親

うしろよりぬきぬきあうま

異つゝ其方の異ハ花里通高き云 風俗

地女園より其あり

佳節ハ紋目なりそのうらうらこころ親

里をおひかあへ

水糸女席

彈琴復長嘯

なぐ一夜を

ひらぐと祿年



肅とハ瘧の皮をむくとりある我うお

いまの海の時とつとじらるあふぬうら

際ちる内うそのうらんとむきて其実の

うやとこがさすこころ



初令切りのまゝ  
初令ハツク切キりのまマゝ

吳姫緩舞留君醉  
吳ゴ姫キ緩ツワン舞ブ留ト君キ醉ラ

今一ひのみゆささるらん

吳姫はうつろひささるらん  
吳ゴ姫キはハうつツろロひヒさサさサるルらん  
と吳服ゴフクといひイ若ニけケと吳物ゴモノといひイ合アひヒ  
吟イよヨめメと吳器ゴキといひイあアらラるル

初令切りのまゝ

羽客室歌此地遠  
羽ウ客カク室シツ歌カ此コノ地チ遠トウ  
離リ筵エン敷シ處ス白ハク雲ウン飛トビ

り来てもあゝ乃送る

羽客はちがもてさびあらくまゝく  
羽ウ客カクはハちチがガもモてテさサびビあアらラくクまマゝマくク  
心ココロをヲ思シひヒるルハハ裾スソのノ翅ツバサとト生ナるルとト思シはハらラるル

少くも一客

深林人不知  
明月来相照

あまぬく可るの月とらん小

深林ハ大なる林を帆柱ヨリ人々  
大木あれども人々次して園也  
こといふはまもくやみさらん

旅一客

欲別牽即衣  
郎今何處

今虫くさむはけはるもみ

帝ハ男子の通称因十命命  
たしりうさ

あくゆ〜ぬ〜め〜客

遮莫

鄰雞

下五更

あつまげり

うさめい

〜



酔つゝあはれ〜客

酔卧 沙場 君 莫笑

あつた〜るめい

われな〜る〜

沙場ハ 利場入 君ハつれ〜

〜

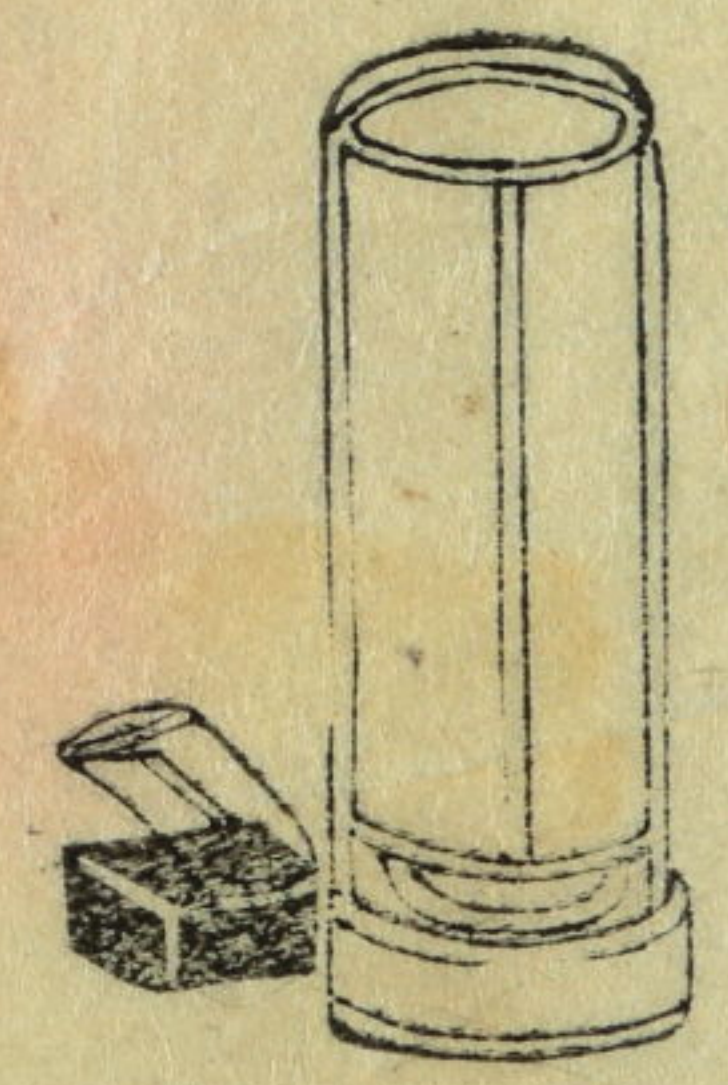


のりねい

聞中只是

空相憶

ころもくくくくくくくくくく



うらよ玉あらかのらんごよー

喧嘩買の密

獨自狂天不懷家

人よきくゆくからうーのり

ねまへ競なりまごい男の獨とハ音ぞく  
毒と遊次人のぞくがれをありひりくと  
訓ずらる人乃非と丸丸ゆらと  
解

夜乃とこつがる客

送君還舊府

明月滿前川

送君還舊府

君ハ女帝ノ旧府ハ

家来ノ府ハ夫ハ

とかつると

戸まどひ

舉頭望山月

低頭思故郷

雲乃ハ

舉頭ハ仰ナリ

低頭ハ伏スル

小使ノ考ナリ

二



子と賣ウ—親心カニ

愁ウレヒ聽キク寒カニ蠶サマ淚ナミダ濕ウルホス衣フコロセヲ

我ワタシ夜ヨのそ

落ツルよわれり

秋アキ發ハまりぐさとしシけりケリ—養ウカ下ゲ

やヤあつきののゆへユヘその夢ユメとささるササ我ワガ

子コ乃ノ入イリ—身ミ—涙ナミダあひがアヒガ

あり

つとめかハ

相逢アヒ

相値アヒ

ちるそ

ちるぬ後

且カ銜フシム杯サツキ

冬フユ坂サカの宴ウタガハシ

且カ銜フシム杯サツキとハトさうつツきキとトあアくクむムはハあアり

その一ヒトニニといイもモ、クちチ上ウアアゲゲヤヤセセウウ—マづづく

ワワキキハハタタババヤヤセセンン オオトトリリアアゲゲナナシシナナムム子コ

骨ハネのり

知<sup>ミツテフルヲセニ</sup>有<sup>ハ</sup>前<sup>マ</sup>期<sup>キ</sup>在<sup>ル</sup>

難<sup>カクシ</sup>分<sup>ビ</sup>

此<sup>コノ</sup>夜<sup>ヤ</sup>中<sup>チウ</sup>

夢<sup>ユメ</sup>の通<sup>トウ</sup>路<sup>ロ</sup>

人<sup>ヒト</sup>のよ<sup>ヨ</sup>き<sup>キ</sup>り<sup>リ</sup>ん



た<sup>タ</sup>ま<sup>マ</sup>く<sup>ク</sup>  
あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>  
る<sup>ル</sup>ま<sup>マ</sup>

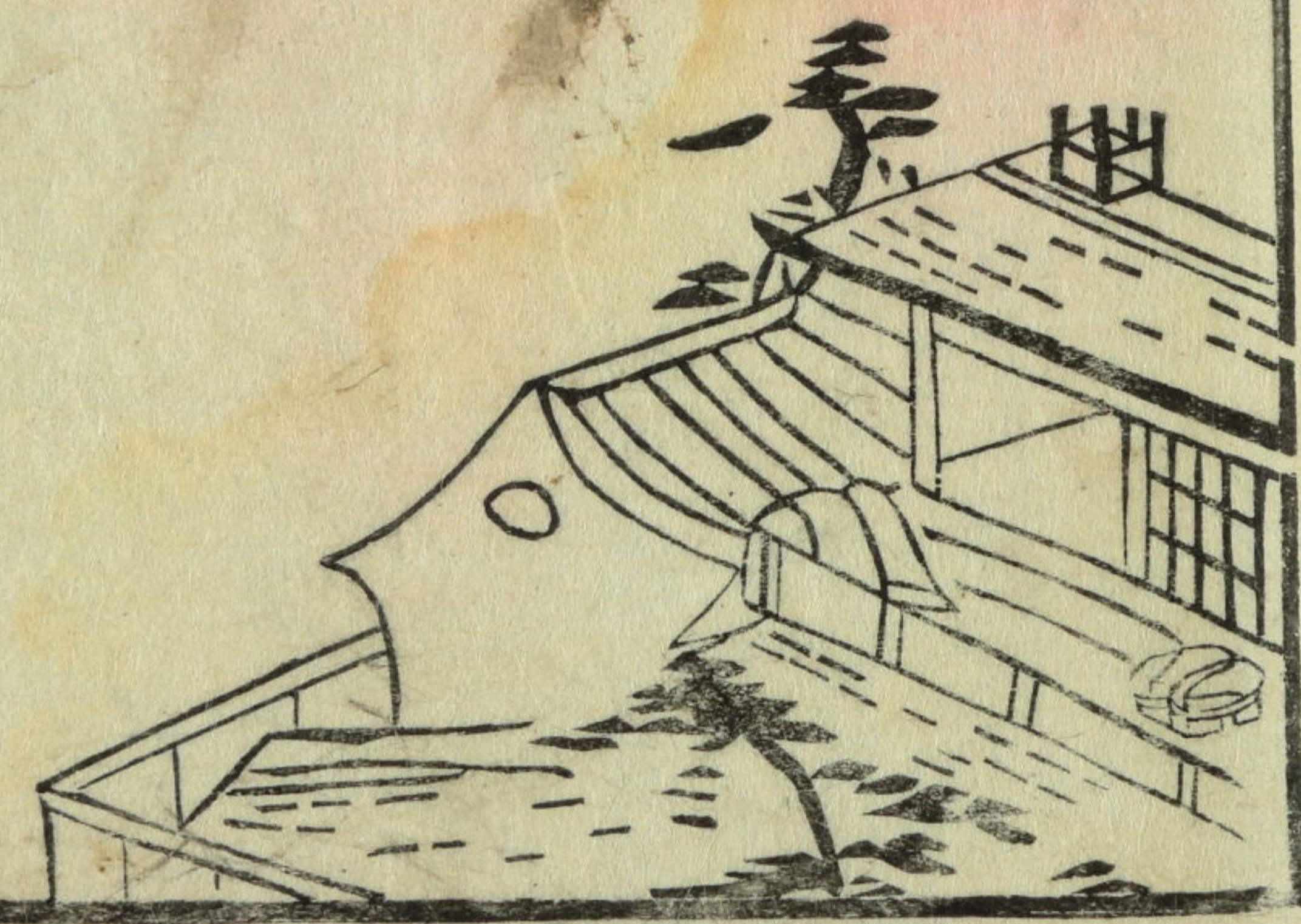
あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>

壳<sup>カ</sup>

莫<sup>ムカシ</sup>令<sup>シテ</sup>長<sup>チヨウ</sup>袖<sup>シュウ</sup>倚<sup>ヨリ</sup>欄<sup>ラン</sup>干<sup>カン</sup>

け<sup>ケ</sup>や<sup>ヤ</sup>神<sup>カミ</sup>の

あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>に<sup>ニ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>





前ゼン期キとハ注チウ又ヤクミク契ケイ約ヤクナトク子  
今イマ考カウる小コ期キの字ジ盖ヘ起キの字ジカクンル  
前マ起キるナトク一ヒト之コノ意イトク入イるナトクハ  
次ツギの句クとのつらつらる

長チヤウ神シンハウウそぞく長チヤウ子シののノガククするを  
すてウウとらラする初ハツメ必カナラシ極キョクスルナトク  
うけウケヤヤらんランは神カミとトうけウケ一ヒト又マタ延ノビ出デ  
らラもモ義ギつツる

たいこチ揚チヤウつツ新シン造ゾウ

閨ケイ中チュウ婦フ

不ス知チ愁シュ

あまのけしき

あまのけしき

置ケイ中チュウハ夫フハ注チウするスルとク少セウ婦フを  
夫フ人ニンとトなり

いまのけしきあまのけしき新シン造ゾウし  
格キヤク子シとク(か)とク重チヤウ也ヤとクとク

月見の甚れ也

一時回首月中看

三笠の心平

お月の子

回首とハ中の所の方もしくびを回せば  
月の甚れ夜はありかつづく夜更に冥  
又月れ甚れありく

面白く遊春

總向春園裡  
花間笑語聲

花はくさくさ死なむはげれ

春園裏とハ遊と舞するがごとく  
花がハ花はくさくさ死なむはげれ  
そのもよもよ中歌えらうをやま  
ゆいさ心なる口をを理よけはるたおと云

夜番 ヨバン

旅館寒燈獨不眠 リョウイン カンテウ トリヒ 不眠

白きとくれん雪ろ文よる シロキ トクレンユキロウモンヨル

人乃名なり ヒトノナナリ  
旅帳ハシとよめとる乃とる リョウチャウハシトヨメトルノトル



舟やど フネヤド

江南江北 カンナンカンポク

送客歸 オウキヤクキ

系 ケイ

な井 ナヰ

水々々々 ミヅミヅミヅミヅ



黄を流

黄河入海流

こいろうとアて例とありらる

黄河といふ所の水のなりゆく川あり

肛門関乃をこよりおくれを冀州

入と漢書地理志云云

漢音 冀州

揚屋の紙屑紙

積雪浮雲端

みこ乃言屋上をハありけ

積雪の紙のかけて白きかちなり

園中しふふやしくんんくこ

うら陰陽のめたる人たま時あり

雪これ出積をとる

賢と女帝

寶劍直千金

分レ手脱相贈

とさやとハセ隊——らまくれ茶

直とハがぐらう——その妙地直千金と

なる事のぬをり分よ分よとハて意今

まであり——簪を脱と何存へゆる

とくはなり

ついで花のある女帝

年花落

無人見

志川え流なく志のちる母

花異本鼻工作るハ池なり

志はふなく志川ハ城くヤーさ

やとめのとりよ

客心争日月

客乃よの女帝

たうくもくれと思ひぬるは

争日月とハ日数月数揚づめ

よせんと客とふあそよなり

客すゆひのよの女帝

峨眉山月

半輪

秋

客

月乃

客の

客の



床で骨と朽し女席

孤城遙望玉門關  
黃沙百戰穿金甲

みよめくきけ物とては思へ

孤城一帯之の城之黄沙ハ功者ト云  
解也穿金甲ハ軍士甲冑ト帯  
冥中と修くんとて時と云は  
我よる孤者ト一ト

水上の空

此夜断腸  
人不见

ワ種ても

いんまおのめ

断腸と云ふはけいしんをいふ  
人不见はあはれおの人の断腸を  
見ぬしつめりつるなり

年一室

春光

夢みるよの

不度

ふりて

玉門関

ゆきする

春光しんくわうは春はるのごころささのあつらひ  
よよのいぢふふななくくぬぬししくくふふ夜よと  
いい屋やににああるるへへしし

大門の掛

ひふハ

雙掛

まゑは

日月照

ゆとこをねん

乾坤

乾坤けんこんとハ二階にがいと下したのあまとあま



六

六

三

下



六  
巾  
たつれ易不

為問門前客  
今朝幾回来

幾束福さめぬす乃乃一玉子

幾箇来の箇ハ駕と趣且或いそく  
そ何ことかる是れむじい門前あり  
はつまるをとんて家さぬえ

吉系れ志實

黄金不多

交不深

や乃乃行く

よあ

一のやうにゆくがよ



六

寶曆七丁丑歲正月吉日

書林

東都淺草御藏前茅町二丁目

本校本町四丁目

六河亦次郎板

柴田彌兵衛全



下三十三

